平成３０年度　東濃地区教育推進協議会　　小学校　　実践交流会発表資料

図画工作科　　瑞浪市立瑞浪小学校　野村　美智子

１　研究主題について

（１）研究主題

試し求めることができる素材のよさを十分に生かす題材の工夫

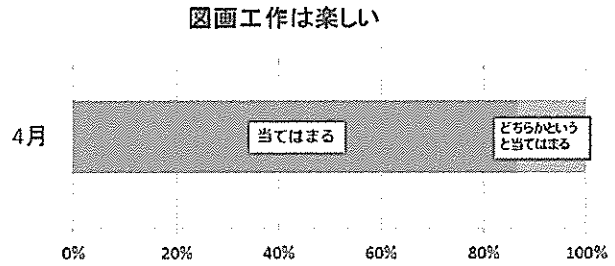
（２）主題設定の理由

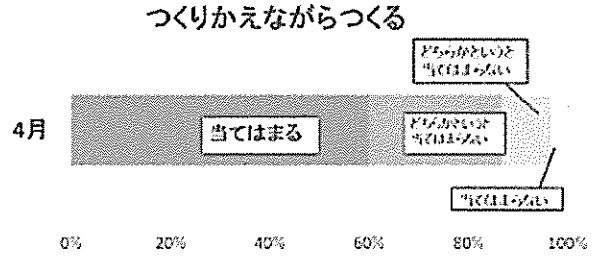
小学校学習指導要領の図画工作の第３学年及び４学年の目標（２）で、次のように述べられている。

材料などから豊かな発想をし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫し、造形的な能力を伸ばすようにする。

材料などの感じから、楽しみながら発想し、手を十分に動かしたり、用具を用いたりして自分の思いや願いの表し方を試しながら見付ける力と考える。

４月にアンケートを実施したところ、図画工作を楽しいと感じている児童は、肯定な回答（当てはまる、どちらかというと当てはまる）は１００％である。しかし、つくりかえながらつくるに関しては、「当てはまらない」児童が数名いる。このことから、図画工作を楽しいと感じながらも、試しながら、どんどん新しい表現を求めることに抵抗感や困り感を抱いている児童がいるのではないかと考えた。





（３）目指す児童の姿

題材を通して、憧れや願いをもち、試しながら表し方を求めてつくろうとする姿。

２　研究内容について

（１）研究仮説

中学年の児童は、表現活動において、表し方を工夫することに意欲を示したり、想像したことを実現することに熱中したりするようになる。手などの働きも巧みさを増し、扱える材料や用具の範囲も広がってくる。同時に、周りとのかかわりも活発になり、仲間の発想やアイデアを参考にし、取り入れようとする姿も見られる。

このような特徴から、次のように考えた。１つ目は製作に入る前や途中段階に新たな表現の見方や考え方を交流する場を設ける。２つ目に、活動前と後の変容が分かる作品提示や実演をする。これらの時間や環境を整えることで、うまくいかないところや、困り感が和らぎ、見通しをもつことや自分もやってみたい、もっとつくってみたいという追求に向かうことができる。そして、児童が自ら材料に働きかけることを通して、そこから生まれる表し方のよさや面白さを見付けながら自分なりの作品づくりができると考えた。

（２）研究内容

①　題材・素材と指導計画の工夫
　ア　造形活動における確かな力の分析と題材、素材の設定
　イ　学び方を身に付け、確かな力を身に付けられる学習過程
　ウ　児童が評価できる評価規準を位置づけた指導計画の作成

②　指導・援助と評価の工夫
　ア　課題づくりと課題提示の在り方
　イ　課題解決のための資料提示の在り方と交流のもちかた
　ウ　効果的な評価の在り方

③　学習環境の工夫
　ア　教室環境づくり
　イ　試し求める環境づくり

3　実践事例

第３学年「魚にへんしん」（立体に表す）

①　題材・素材と指導計画の工夫

ア　造形活動における確かな力の分析と題材、素材の設定

・図画工作のアンケートを実施し、児童の実態把握と手だてを考える。
・前学年までの学習内容の把握により、発達段階にあった題材計画をする。
・児童の興味関心や生活体験との関わりを大事にする。

イ　学び方を身に付け、確かな力を身に付けられる学習過程

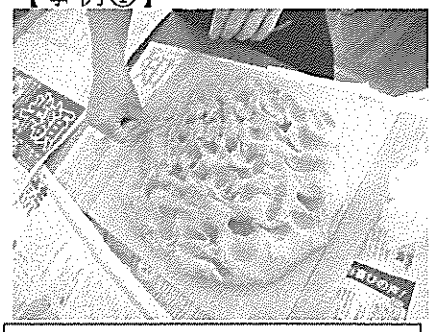
・手と指を十分に動かし、素材感を実感する

１年生の時に粘土作品をつくって以来、久しぶりに粘土を扱う。
そこで、事例①のように、作品づくりに入る前に、粘土の感触を味わいながら、手と指だけでもいろいろな表現にできる実感や、何度でもやり直せる素材のよさを感じ取る時間を確保することで、作品づくりの表現の幅を広げられると考えた。また、助言や注意点を理解した上で粘土を扱えば、作品づくりに集中して臨める。

・自ら“わざ”を見付ける楽しさを実感

前学年までに、「押す」「つまみ出す」の表し方を経験している。身体も少し大きくなり、前回より５００ｇ多い２kgの粘土の塊を使うことにする。粘土をたくさん触ることを試みれば、粘土の感触を実感し、自らいろいろな形にできることに気付き、新たな見方ができると考えた。そこで、自分なりに手や指の使い方を工夫して、何度も試しながら、気に入った表し方を紹介し合う学習隊形にした。また、「押す」「つまみ出す」などのいろいろな表し方を「わざ」という言葉で整理し、試したり、仲間と交流したりする時に共通の言葉で学びあう姿を目指した。

【事例①】



児童の振り返り
たくさんのわざを使ってみると、すごく面白いもようができるんだと思いました。

ウ　誰もが評価できる評価規準を位置づけた指導計画の作成・・・指導案参照

児童の実態を把握し、試す時間を設けたことで、手や指を十分に使えなかった児童が、自ら「やってみる、とってみる、かえてみる」姿につなげることができた。また、全員がいろいろな技を経験していることから、粘土を扱うコツや留意点を共通理解した上で作品づくりに臨み、表したいことに集中することができた。
今後も発達段階に合わせて、新たな表現や用具を扱えるような創造的な技能を高める指導が必要である。その際、児童が自ら「こんなこともできる」「もっと、やってみたい」と、造形意欲を高められる手立てを考えていきたい。

②　指導・援助と評価の工夫

ア　課題づくりと課題提示の在り方

・児童の製作の状況を捉え、更なる発想・構想を広げるための教師作品の鑑賞することを通して、児童の気付きやつぶやきをまとめ、課題につなげることで、試しながら製作することができる。

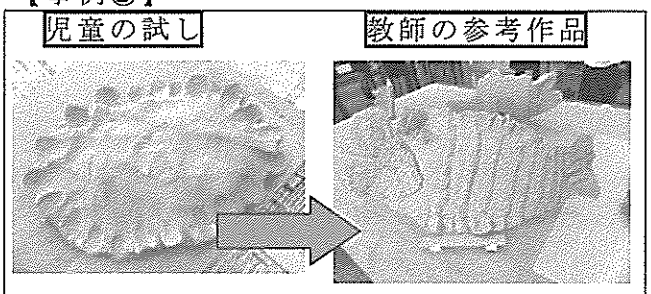
イ　課題解決のための資料提示の在り方と交流のもちかた

・児童の見付けたアイデアを生かす参考作品の提示

導入では教師作品だけでなく、前時の児童の試しや作品の中から、ねらいにつながる新しい表現の価値づけとともに、同じ表し方から多様にバリエーションを増やせることに気付く手立てとなる参考作品を提示する。

・**前時の参考作品を生かした実演**
参考作品に憧れをもち、「自分だったら」「つくってみたいな」という願いを大事にしたい。児童が「こうすればできる」という明確な見通しをもって製作に臨めるような手立てを考えたい。
そこで、事例②のように参考作品を提示し、前時の作品を使って実演する。

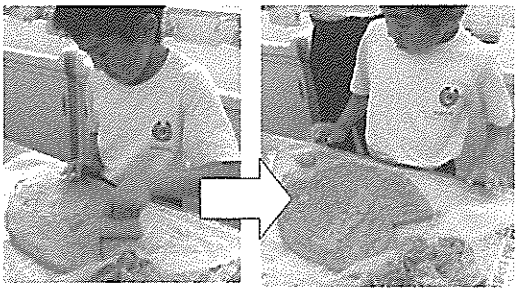
【事例②】



手や指を十分に使い、新しい表現を認め、その表し方を生かす参考作品を提示する。

・**製作途中における表現の見方を深める取り組みや作品の紹介**
製作過程においては、一気につくりあげていく児童もいれば、何度も試しながら少しずつ進める児童がいる。３年生の実態から考えると、自分の見方や考え方で作品づくりを進める児童も少なくない。
そこで、新たな表現やねらいにつながる作品を意図的に取り上げて価値づけ、気付きやよさを交流する場を設けた。

ウ　効果的な評価の在り方
・終末に課題につながる作品を意図的に紹介し、よさを共有する時間を設けた。
・共有したよさで一人一人が活動や作品を評価し（事例③）、その場でできたかを挙手で見届けるようにした。

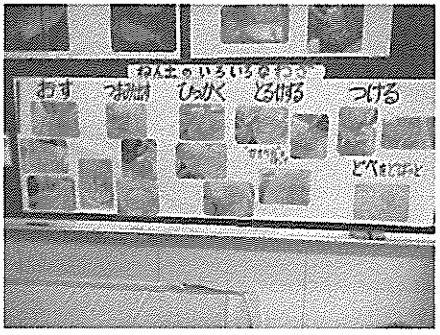


【事例③】

児童の振り返り
全体にひっかくわざをつかいました。ほかにもやってみたけど、お気に入りはとげのような丸いうろこをどべでどばっとつけて、重ねてもようにしたところです。

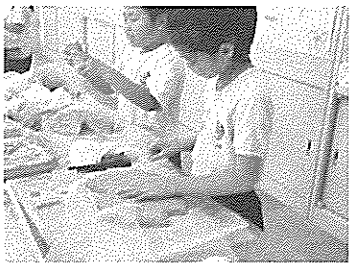
児童がつくったものを参考資料として取り上げたことで、これでいいんだという自信や、もっと、よいものをつくりたい、自分もやってみたいという作品づくりへの更なる意欲を高め、見通しをもつことができていた。
製作途中の交流は、様々な気付きが飛び交い、作品のよさを交流することで、交流後、作品に生かしたり、自信をもって続けたりする姿につなげられた。これでいいんだという自信をもち、もっと、いいものをつくりたいという求める姿を感じることができた。

③　学習環境の工夫
ア　教室環境づくり
・児童が試したいろいろな表し方を整理し、製作中に見やすいところに掲示することで、わざを思い出すきっかけや、つまずきの手立てになるような環境を整えた。
また、全体で確認するような場面では資料の見えるところで指し示すなどして有効に使うことができた。
・参考作品を教室の中央に展示し、つまずきやアイデアの参考になるような環境にした。



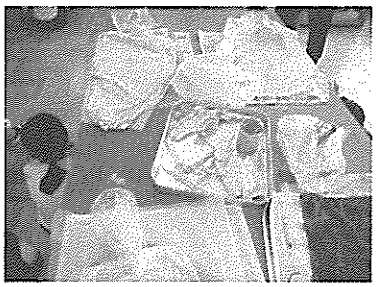
イ　試し求める環境づくり

・本題材のように、平らな粘土作品づくりでは、粘土と粘土板がくっついてしまい、位置を変えたり、つくりかえようとすることに躊躇したり抵抗感を感じる様子が多く見られる。そこで、粘土と粘土板の間に、製作する上で支障のない物を検討した。
・用具をグループでまとめ、手がとどき、自由に使えるようにする。



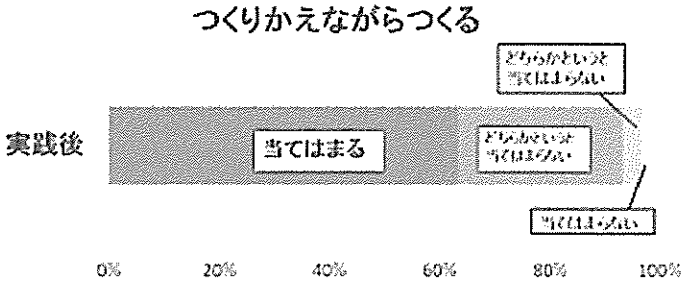
◀不織布の活用により、粘土板を使わず、大きな作品でも粘土の向きを変えながらつくることができる。

グループ机の中央に浅めのトレーを▶用意し、用具をどの児童も手に取りやすく、準備や片付けがしやすいした。



迷ったり、困ったりしながらも、参考作品を見たり触れたりしながら、試したいときに用具などを使える環境が整っていることで、自ら解決して表現を決めてつくっていく姿をたくさん見ることができた。

4　成果と課題



〔成果〕

○作品を一気につくりあげようとしていた男子児童が、周りの児童の作品をヒントにしてつくりかえている姿が見られた。それは、新しい表し方に触れ、自分もやってみたい思いを高められ、どの児童もそれを実現可能な環境であったからだといえる。
○作品づくりの前にいろいろな表し方を試す時間を設けたことで、粘土の特徴を生かす作品づくりにつなげることができた。
○１単位時間に沿った参考作品、資料を用意したことで、どの児童も見通しをもって活動に入ることができた。
○製作途中で、表現の見方を深める作品を見合うことで、さらに新たな表現を試し求めようとする姿につなげることができた。

〔課題〕

・いろいろな表し方を試すことができる素材であるからこそ、表現をどんどん取り入れるばかりでなく、取り除いたり、見直したりする見方を助言していきたい。

・表し方の組み合わせで、とても素敵な模様の表現ができていた。全体の形も試したくなるような指導内容や、わくわくするようなテーマを考えていきたい。

5　課題克服のための今後の方向

・焼成する粘土を扱う題材では、乾燥を避けるため、製作時間を集中することになる。前時までの表現と本時の表現を比べ、変容を確認するような場面では、OA 機器などを使い、その場で画像として見られるようにする。評価としても効果的である。また、製作中に児童が確認しながら、試し求めていく姿にできるとよい。
・扱い方によっては、焼成して作品として仕上がるまでに割れてしまうことや、製作中に空気が入ることもある。粘土の特徴を理解するよう指導するとともに、小学生が扱いやすい粘土を選定していくことも検討したい。